

釈迦仏は我等が為には主なり、師なり、親なり。一人してすくひ護ると説き給へり。阿弥陀仏は我等が為には主ならず、親ならず、師ならず。然れば天台大師是を釈して曰く「西方は仏別にして縁異なり、仏別なるが故におんけん隠顯の義成ぜず、縁異なるが故に子父の義成ぜず。又此の經の首末に全く此の旨無し、眼を閉じてせんさく穿鑿す」と。むべ実なるかな、釈迦仏は中天竺の淨飯大王の太子として、十九の御年家を出で給ひて檀特山と申す山にこも籠らせ給ひ、たかね高峰に登りては妻木をとり、深谷に下りては水を結び、難行苦行して御年三十と申せしに仏にならせ給ひて一代聖教を説き給ひしに、うわ上べには華嚴・阿含・方等・般若等の種々の經々を説かせ給へども、内心には法華經を説かばやとおぼしめされしかども、衆生の機根まちまちにして一種ならざる間、仏の御心をば説き給はで、人の心に随ひよろず万の經を説き給へり。此くの如く四十二年が程は心苦しく思し食ししかども、今法華經に至りて「我が願ひ既に満足しぬ、我が如くに衆生を仏になさん」と説き給へり。久遠より已来、或は鹿となり、或は熊となり、或時は鬼神の為に食はれ給へり。此くの如き功德をば法華經を信じたらん衆生は是眞せしんぶつし仏子とて、是実の我が子なり、此の功德を此の人に与へんと説き給へり。是程に思し食したる親の釈迦仏をば、ないがしろに思ひなして「唯以一大事」と説き給へる法華經を信ぜざらん人は争でか仏になるべきや。よく能く心を留めて案ずべし。

二の巻に云はく「若人にやくにん不信毀謗此經、則斷一切世間しんきぼうしきょう仏種、乃至不受余經一偈」と。文の心は、仏にならん為には唯法華經を受持せん事を願ひて、余經の一偈一句をも受けざれと。三の巻に云はく「如によじゅう從け飢こく國らい來こつ忽だい遇おう大王膳」と。文の心は、飢餓たる国より来たりて忽ちに大王の膳にあへり。心は犬野干の心を致すとも、迦葉・目連等の小乗の心をば起こさゞれ。破れたる石は合ふとも、枯れ木に花はさくとも、二乗は仏になるべからずと仰せられしかば、須菩提は茫然として手の一鉢をなげ、迦葉は涕泣ていきゅうの声大千界を響かすと申して歎き悲しみしが、今法華經に至りて迦葉尊者は光明如来の記莂きべつを授かりしかば、目連・須菩提・魔訶迦旃延等は是を見て、我等も定めて仏になるべし、飢餓たる国より来りて忽ちに大王の膳にあへるが如しと喜びし文なり。我等衆生むしこうごう無始曠劫より已来、妙法蓮華經の如意宝珠を片時も相離れざれども、無明の酒にたばらかされて、衣の裏うらにかけたりとしらずして、少なきを得て足りぬと思ひぬ。南無妙法蓮華經とだに唱へ奉りたらましかば、速やかに仏に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわずかなる戒を以て、或は天に生まれて大梵天・帝釈の身と成りていみじき事と思ひ、或時は人に生まれて諸の国王・大臣・公・・殿上人等の身と成りて、是程のたのしみなしと思ひ、少なきを得て足りぬと思ひ悦びあへり。是を仏は夢の中のさかへまぼろしのたのしみなり、唯法華經を持ち奉り速やかに仏になるべしと説き給へり。

又四の巻に云はく「^{しか}而も此の^な經は如来の^な現在すら猶^な怨嫉多し、況んや滅度の後をや」云云。釈迦^し仏は^し師子^し頰^し王の^じ孫、^じ淨飯^じ王には^ち嫡子^しなり。十善の位をすて、五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすて、十九の御年出家して勤め行なひ給ひしかば、三十の御年成道し御坐しまして三十二相八十種好の御形にて、御幸なる時は大梵天王・帝釈左右に立ち、多聞・持国等の四天王先後に圍繞せり。法を説き給ふ御時は四弁八音の説法は・園精舎に満ち、三智五眼の徳は四海にしけり。然れば何れの人か仏を悪み奉るべきなれども、尚怨嫉するもの多し。まして滅度の後一毫の煩惱をも断ぜず、少しの罪をも弁へざらん法華經の行者を、^{にく}悪^{ねた}み嫉^{うん}む者多からん事は、^{うん}雲霞の如くならんと見えたり。然れば則ち末代悪世に此の經を有りのまゝに説く人には敵多からんと説かれて候に、世間の人々我も持ちたり、我も読み奉り行じ候に、^{そら}敵なきは^{そら}仏の虚言か、法華經の実ならざるか。又実の御經ならば当世の人々經をよみまいらせ候は^{そら}虚よみか、実の行者にてはなきか、如何。能く能く心得べき事なり。明らむべき物なり。

四の巻の多宝如来は釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り給ふに、初めには華嚴經と申す經を十方華王のみぎりにして別円頓大の法輪、法慧・功德林・金剛幢・金剛藏等の四菩薩に対して三七日の間説き給ひしにも来たり給はず、其の二乗の機根叶はざりしかば、^{ようらくさいなん}瓔珞細軟の衣をぬぎすて、^そ龕^{べい}弊垢膩の衣を著、^は波羅^な奈^こ国^{ろく}鹿^や野^あ苑に趣きて、十二年の間^{しょうめつしたい}生滅四諦の法門を説き給ひしに、^あ阿^に若^{やく}俱^{りん}隣等の五人証果し、八万の諸天は無生忍を得たり。次に欲・色二界の中間大宝坊の儀式、淨名の御室には三万二千の床を立て、^{びやくろち}般若白鷺池の^{ほとり}辺十六会の儀式、^{こゆう}染淨虚融の旨をのべ給ひしにも来たり給はず。法華經にも一の巻乃至四の巻人記品までも来たり給はず、宝塔品に至りて初めて来たり給へり。釈迦仏先四十余年の經を我と虚事と仰せられしかば人用ふる事なく、法華經を真実なりと説かせ給へども、^む仏は無^こ虚^{もう}妄の人とて永く虚言し給はずと聞きしに、一日ならず二日ならず、一月ならず二月ならず、一年二年ならず、四十余年の程虚言したりと仰せらるれば、又此の經を真実なりと説き給ふも虚言にやあらんずらんと不審をなししかば、この不審釈迦仏一人しては舍利弗を始め、^晴事は^晴れがたかりしに、此の多宝仏、宝淨世界よりはるばると来たらせ給ひて、法華經は皆是真実なりと証明し給ひしに、先の四十余年の經々を虚言と仰せらるゝ事、実の虚言に定まれり。

又法華經より外は一切經を空に浮かべて、文々句々阿難尊者の如く^{おほ}覺^{ふる}へ^な富樓那の弁舌の如くに説くとも其れを難事とせず。又須弥山と申す山は十六万八千由旬の金山にて候を、他方世界へつづてになぐる者ありとも難事には候はじ。仏の滅度の後、当世末代悪世に法華經を有りのまゝに能く説かん、是を難しとすと説き給へり。五天竺第一の大力なりし提婆達多も、^{たけ}長^は三丈五尺広一丈二尺の石をこそ仏になげかけて候ひしか。又漢土第一の大力、楚の項羽と申せし人も、九石入りの釜に水満ち候ひしをこそ、ひさげ候ひしか。其れに是は須弥山をば^な投ぐる者は有りとも、此の經を説の如く読み奉らん人は有りがたと説かれて候に、人ごとに此の經をよみ書き説き候。經文を虚言に成して当世

の人々を皆法華經の行者と思ふべきか。能く能く御心得有るべき事なり。

五の卷提婆品に云はく「若し善男子善女人有って、妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄餓鬼畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん」と。此の品には二つの大事あり。一には提婆達多と申すは阿難尊者には兄、斛飯王には嫡子、師子頰王には孫、仏にはいとこにて有りしが、仏は一閻浮提第一の道心者にてましましゝに怨をなして、我は又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓ひて、万の悪人を語らひて仏に怨をなして三逆罪を作りて現身に大地破れて無間大城に墮ちて候ひしを、天王如来と申す記莖を授けらるゝ品にて候。然れば善男子と申すは、男此の經を信じまひらせて聴聞するならば、提婆達多程の悪人だにも仏になる。まして末代の人とはたとひ重罪なりとも多分は十悪をすぎず。まして深く持ち奉る人、仏にならざるべきや。二には娑竭羅竜王のむすめ竜女と申す八歳のくちなは仏に成りたる品にて候。此の事めずらしく貴き事にて候。其の故は華嚴經には「女人は地獄の使ひなり、能く仏の種子を断ず、外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と。文の心は女人は地獄の使ひよく仏の種をたつ。外面は菩薩に似たれども内心は夜叉の如しと云へり。又云はく、一度女人を見る者はよく眼の功德を失ふ。設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからずと云ひ、又有る經に云はく「所有の三千界の男子の諸の煩惱を合はせ集めて一人の女人の業障と為す」と。三千大千世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取り集めて女人一人の罪とすと云へり。或經には三世の諸仏の眼は脱けて大地に墮つとも、女人は仏に成るべからずと説き給へり。然るに此の品の意は畜生たる竜女だにも仏に成れり。まして我等は形の如く人間の果報なり。彼が果報にはまされり。争でか仏にならざるべきやと思し食すべきなり。中にも三悪道におちずと説かれて候。

其の地獄と申すは八寒八熱乃至八大地獄の中に、初め浅き等活地獄を尋ぬれば此の一閻浮提の下一千旬なり。其の中の罪人は互ひに常に害心をいだけり。もしたまたま相見れば獵師が鹿にあへるが如し。各々鉄の爪を以て互ひにつかみさく。血肉皆尽きて唯残りて骨のみあり。或は獄卒、棒を以て頭よりあなうらに至るまで皆打ちくたく。身も破れくだけで猶沙の如し。焦熱など申す地獄は譬へんかたなき苦なり。鉄城四方に回りて門を閉ぢたれば力士も開きがたく、猛火高くのぼって金翅のつばさもかけるべからず。餓鬼道と申すは其の住処に二あり、一には地の下五百由旬の閻魔王宮にあり。二には人天の中にもまじって其の相種々なり。或は腹は大海の如く、のんどは鍼の如くなれば、明けても暮れても食すともあくべからず。まして五百生七百生など飲食の名をだにもきかず。或は己が頭をくだきて脳を食するもあり。或は一夜に五人の子を生みて夜の内に食するもあり。万の果林に結ぶ、取らんとすれば悉く劍の林となり、万水海に入る、飲まんとすれば猛火となる。如何にしてか此の苦をまぬかるべき。次に畜生道と申すは其の住所に二あり、根本は大海に住す、枝末は人天に雜はれり。短かき物は長き物にのまれ、小さき物は大なる物に食はれ、互ひに相食んでしばらくもやすむ

事なし。或は鳥獸と生まれ、或は牛馬と成りて重き物をおほせられ、西へ行かんと思へば東へ遣やられ、東へ行かんとすれば西へやらる。山野に多くある水と草をのみ思ひて、余は知るところなし。

然るに善男子善女人此の法華經を持ち、南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、此の三罪を脱まぬがるべしと説き給へり。何事か是にしかん、たのもしきかな、たのもしきかな。又五の巻に云はく「我大乘の教をひら闡いて、苦の衆生を度脱とだつせん」と。心は、われ大乘の教をひらいてとは法華經を申す。苦の衆生とは地獄の衆生にもあらず、餓鬼道の衆生にもあらず、只女人を指して苦の衆生と名づけたり。五障しょう三従じゅうと申して、三つしたがふ事有りて、五つの障さわりあり。竜女は、我女人の身を受けて女人の苦をつみしれり。然れば余をば知るべからず。女人を導かんと誓へり。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

日 蓮 花 押